

2. 外国語教育 分科会報告

(報告者：徳長)

レポートは3本であった。

- 1 「新学習指導要領での中学校教科書を高校教員の視点から考察」 徳長 誠一 (道高教組・旭川西高校分会)
- 2 「オンラインの無料ツールを使った訳読、インテイク授業のアプローチ」
小笠原 孝司 (北星学園大学附属高等学校)
- 3 「千歳高校国際教養科の取り組みについて」 水野 豪人 (道高教組・千歳高校分会)

1. 「新学習指導要領での中学校教科書を高校教員の視点から考察」の報告概要は以下の通りである。

新しい学習指導要領が、小中学校では2021年度(今年度)から、高等学校では2022年度(来年度)から始まる。今年度からの中学校の教科書を見て、語彙数の多さ、文法の多さ、文章の難易度の高さに驚かされた。本論では、新学習指導要領での中学校教科書を高校教員の視点から考察することで、現在の中学校3年生の生徒が、どのように、中高の接続をして、学びを豊かに展開できるかを考察した。

教科書に関する音声・動画に関して、QRコードを用いて、生徒が無料で使えるのは、進化である。公教育に「一人一台端末」が導入されたことに伴うのだろう。中学生用辞書(英和・和英)を生徒が使うことは、必須といえよう。辞書の購入費用に関して、捻出が苦しいという家庭があることを踏まえると、図書室での整備も不可欠かもしれない。学習指導要領にも「オ 辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること。」とある。実際に中学校で英語を教えている知人からは「学習指導要領の移行措置で、急に学ぶ項目が増え、定着までに到達するのも難しい」「小学校での学習内容が、中学校の教科書で十分に触れられていないので、ワークシートで補うなどの対応を余儀なくされている」という声を聞いている。リーディングに関しては、難易度の高さと、生徒の学力格差という課題に直面させられるだろう。「概要」「詳細」を教科書の設問段階で終えるならば、生徒たちからは「どうしてそういう意味になるのか」という問いに十分に答えているとはいいがたく、不満が残るだけだろう。教員が、文構造を示したワークシートを復習用に配布するなどといった、生徒が自学自習できる資料を提示することも大切に思う。

2 「オンラインの無料ツールを使った訳読、インテイク授業のアプローチ」の報告概要は以下の通りである。

学習指導要領において、特に発表、やり取り、学習評価の三観点の取り組みが求められている中、現場の生徒は高校教科書での授業の文章内容理解でいっぱいになってしまう。授業者がアウトプットに視点を強めた授業をしたとしても、現実に指導要領が求めるようなアウトプットを自在に行うことが困難だったりする。授業工夫で教員が疲弊していく中で、生徒が端末を利用し、オンラインクイズ形式で理解を進めることで生徒の士気や教員の負担を少しでも減らすための実践が報告された。

勤務校では、2019年度からタブレット端末が貸与されている。2021年度は、感染蔓延の状況時は、通常授業より短縮した時間で、オンライン授業を行うことになった。その期間は生徒同士のやりとりが完全に不可能になる状況に陥った。対面授業が再開し、その負債を少しずつ埋めていった。訳読先渡しを活用し、内容理解のチェックを英問英答(Question & Answer/True-False)や要約(空所補充を含む)する学習をしている。Back translationの演習で、オンラインで、Quizizzによる訳読の演習を行っている。オンラインによる授業アプローチとして、理解に関する演習では、Quizlet、kahootなど、Outputの演習では、Google Jamboardなどが紹介された。オンライン教材を使うと、授業が生徒に残ったり、共有がしやすかったり、と生徒の学習意欲を高める一助になる。課題としては、授業者の準備での煩雑さ、生徒の準備不足(タブレットを忘れる、充電し忘れ)、情報量の多さなどがある。

3「千歳高校国際教養科の取り組みについて」の報告概要は以下の通りである。

北海道千歳高等学校は、普通科、国際教養科、国債流通科の三学科からなる。そのうち、外国語分科会にも関係が深いであろう、国際教養科の取り組みに関しての報告であった。「異文化理解」「時事英語」という学校設定科目を軸に、プロジェクト学習、語学研修、プレゼンテーション、国際交流の要素を経験し、学び、それを進路実現への強みにしている。国際教養科の「3つの矢」（教養を高める言語・自国文化への興味、Think Globally, Act Locally、学びへの探求・学びへの協働）を軸に、JICA 北海道との関わり、千歳バーガープロジェクトで英語版でのチラシやメニューの作成、洋書でのテキスト（TED Talks の話題で5領域の技能を育み世界に関する教養を高める等）、2名のALT 常駐、海外語学研修、英語プレゼンテーションコンテスト、など多種多彩な経験、学びをできる学科である。韓国交流、留学生学校訪問、青年海外協力隊経験者、台湾高校生交流等も、オンライン環境を整備しながら、あくまで生徒が主体であることを追求し続けている。生徒への自治権を委譲し、生徒のアイデアを生かせるような環境づくり。前例を踏襲せずに常に新しいことに挑戦しながら交流し続けることを大切にしている。担当者間の信頼関係を生かしている。こうした生徒たちのがんばりを、教員の努力、様々な機関と連携等でしっかりと支え、前進させている様子が報告された。